

令和5年度文学会講演会（歴史学科）

伝統中国社会と廊橋

——明清時代の福建を中心として——

講演者：三木 聡氏（北海道大学名誉教授）

日 時：2023年10月20日 15:10～16:40

場 所：日進キャンパス1号館1301教室

講演者の三木聡氏は、長年にわたって中国明清時代における福建の農村社会をフィールドとして研究を続けてこられた研究者である。今回の講演では、三木氏が長年関心を抱き調査を続けてきた廊橋について、中国の農村社会における廊橋にはどのような存在形態があるのか、また地域社会の中で如何なる意味を持ったのか、福建の事例を中心に多くの写真と史料にもとづきながら、わかりやすく講演して頂いた。以下、講演内容を発表レジュメをもとにまとめる。

廊橋とは、屋根付きの橋のことで、ハリウッド映画「マジンソン郡の橋」にも登場する。廊橋という呼称は、1940年代に中国の建築史家の劉敦楨が命名したもので、それ以前は、廊屋橋・屋橋・棚橋・亭橋・風雨橋などと呼ばれていた。日本では屋形橋・鞘橋・呉橋と呼ばれ、愛媛県内子町の田丸橋など四国地方にある。また欧米では家橋・Covered Bridge と呼ばれ、フィレンツェのヴェッキ

オ橋が有名である。

中国における廊橋に関する研究は、おもに建築史の分野からはじまり、その後、人文社会的側面を重視した研究が登場した。研究の結果、廊橋の機能には、社交空間・祭祀空間・商業空間・風水機能・標識機能などがあることが明らかとなった。また日本では、地域社会における橋梁の研究が行われ、民間の公共事業として橋梁の建設が行われ、それによって交通路が確保され、市街が形成されるといった一連の過程が明らかにされた。

2000年現在、福建に現存する廊橋は271橋。そのうち寧徳市にある万安橋は中国最長の木拱廊橋で、北宋の元祐5（1090）年に建てられ、1954年に再建されたが、2022年に焼失した（写真）。他方、明清時代の地方志からも福建にあった廊橋の情報を遡及的に収集することができる。地方志に登場する廊橋は、絵図に記されるもの、橋名一覧に登場するもの、橋記として記録されるものの



万安橋

三種がある。例えば、橋名一覧の例として、天啓『邵武府史』には「長春橋に到る。蓋し往來の要津である。以前はわずかに渡し船を設けるだけであったが、増水に遭うと船頭はたじろぎ、咫尺の間も千里のようだった。……また数年がたち知府の李之用・同知の鍾万春・推官の趙賢憲・知府の周之基が相次いで事業を担い、今の所に建造した。橋の墩の数は15、梁は木材を、アーチにはレンガを用い、橋を亭屋で覆った。長さは102丈5尺（約340m）、広さは2丈3尺余（約7.7m）である」と書かれている。

廊橋の商業空間について地方志から、廊橋の中あるいは袂に、常設の店あるいは定期市が開かれ、店舗から店祖という税を徴収し、それを橋梁の維持・修復費用にあてていたことがわかる。なかでも汀州府城門外にある済川橋の袂には、水東街という一大マーケットがあり、江

西米の集散地として、江西の米が集まり、広東に流通する一方、広東からは塩がここに集められたのち江西各地へと流通した。

廊橋の祭祀空間として地方志から、橋中に観音大士が12例、真武大帝が6例、文昌帝君など3例、五顯大帝1例、臨水夫人1例、不明3例が確認でき、おもに道教の神が祀られていたことがわかる。

このように明清時代の福建における廊橋の存在形態は、おもに当該期の地方志によってある程度は復元可能である。また廊橋の役割として、商業空間・祭祀空間としての側面を見出すことができる。

今回の講演では、廊橋を題材に歴史的にどのように迫ることができるのかを、現地調査と史料分析をもとに具体的に提示して頂いた。参加した学生にとって大変有意義な講演会になったことは疑いない。（松下憲一記）

令和5年度文学会講演会（日本文化学科）

シルクロードから正倉院へ

——古今の楽器と音楽を知る——

講演者：古川はるな氏（フルート・横笛奏者）、鮑捷氏（中国琵琶奏者）、銭騰浩氏（笙奏者）

日 時：2023年11月29日 15:10～16:40 場 所：日進キャンパスけやきテラス3階

正倉院に伝わる宝物の中に、中国の唐、日本の天平時代に奏でられていた楽器がある。螺鈿紫檀五絃琵琶などが特に有名だが、そうした楽器を復元し、それを利用して当時の楽曲を演奏する「天平楽府」という楽団が1993年に結成された。それ以来、この楽団は東京国立博物館や奈良国立博物館をはじめとする国内各地、さらにはアメリカや中国各地で演奏会を行っている。今回はその楽団で横笛を担当されている古川はるな氏と、笙を担当されている銭騰浩氏、それに、楽団のメンバーではないけれども中国琵琶の奏者である鮑捷氏の3人を招いて、シルクロードから正倉院、そして現代へとつながる楽器の系譜と音楽の伝統、さらにはその楽曲に込められた思想について、演奏を交えながら講演いただいた。

まずは、3人が即興で合奏しながら入場された後、古川氏によって3つの楽器についての簡単な紹介がなされた。横笛は古代インドが発祥と言われており、西洋ではフルートを生み出す一方、東洋では特に大きな変化は起こらなかった。ただし、横笛の中でも短いものは日本特有のものである。琵琶はその原型が古代ペルシャで生まれた後、西洋ではリュート、東洋で琵琶となった。笙は中国で生まれたものが、西洋ではアコーディオンへと発展したとのことである。

次いで、古川氏が改めて横笛の説明とともに、天平楽府を率いる劉宏軍氏が天平時代をイメージして作曲した「飛仙引」と「鳥の鳴歌」を2種類の横笛で独奏し、鮑

氏が同様に、中国琵琶の説明を交えながら鞠士林氏作曲の「春江花月夜」と王慧然氏作曲の「彝族舞曲」を独奏された。また、銭氏は胡天泉氏と董洪徳氏の合作の「鳳凰展翅」を現代中国の笙で、また、海沼實氏が作曲した童謡の「里の秋」を正倉院に伝わる笙の復元楽器で独奏するとともに、古代の笙と現代中国の笙との違いを解説された。

その後、再び3人の合奏で3曲が披露された。最初に演奏されたのは、敦煌莫高窟で発見された楽譜を劉宏軍氏が復元した「急曲子」であり、かつてシルクロードのオアシスで生活していた人々の喜びを感じさせる明るく楽しい曲調のものであった。次に、平等院鳳凰堂の壁面を飾る雲中供養菩薩や、衆生来迎図に描かれている菩薩たちによって奏でられたとされる極楽浄土の音楽をイメージして劉宏軍氏が作曲した「仏国残照」が奏でられた。ゆったりとした曲調は、平安時代に生み出された日本独特のものとのことである。そして最後に、敦煌の壁面に描かれている天女の舞や、シルクロードの舞人たちがアップテンポでくるくる回りながら踊る胡旋舞をイメージして劉宏軍氏が作曲した「夢胡伎」が演奏された。この曲は、「仏国残照」とは対照的に、聞いている者も思わず身体を動かしたくなるような陽気なものであった。

普段聞くことのできない伝統的な楽器で、日本の雅楽や舞楽の源流ともいえる1200年前の日本の、そして東



天平楽府の公演風景

アジアの音楽を鑑賞することのできる貴重な時間となった。聴講した学生たちのアンケートからも、なかなか触れることのできない素敵な音楽を鑑賞できて、楽しくも得難い講演会（演奏会）であったとの意見が様に認められたことは、主催した日本文化学科として大変にうれ

しい成果であった。ちなみに、天平楽府のコンサートは、愛知県内では一般の聴衆向けには未だ行われていないとのことである。是非とも愛知学院大学でその演奏を楽しむ機会を持てることを願ってやまない。（木村文輝記）



演奏中の左から古川氏（横笛）、鮑氏（中国琵琶）、銭氏（中国笙）



左から古川氏、鮑氏、銭氏